

みんなまで手分けして行い、借金を返済するために、長野山緑地公園の食堂売店の管理を始めました。

その頃が苦勞と言えは苦勞の時期だったでしょうか。誰も商売の経験がなく、初めてのことでしたが、試行錯誤を重ねるうちに借金を6年で完済することができたのです。その時は本当に嬉しくて、みんなで大喜びしました。

今は特に苦勞と感じていることもなく、宿泊施設を含む長野山緑地公園全体の管理運営を担いながら、地域食材を使った定食やワザビ漬け、柏餅等を製造し、周南市内で広く販売するなど、地域の資源を使い、地住民が主体となった「むらづくり」を続けています。

## 活動される上で特に気を付けておられることがありますか？

地域で困っていることを地域のみんなで話し合い、その年にするべきことを決めます。何をするか、経費はどうするか、どんなことでも話し合い、決定したことは地域のみんなの情報共有しながら動いています。それぞれの考えを尊重し、地域住民の和を大切にすることで円滑に活動できます。

「救急車が来て家場所がわかりにくいため、非常に困った」という意見で、今年は外部から来た人がわかりやすいように、地域のあちこちに案内の看板を設置しまし



た。「むらづくり」は、地域みんなが参加できることが大切だと考えています。

## 地域における女性の活躍についてどのようにお考えですか？

「渋川をよくする会」を立ち上げる時に、「これからは女性の時代、女性たちが運営していけば、男性は後ろでしっかり協力する」と言われました。

発足後は、高齢化率70%以上の限界集落を活性化させたいと、むらづくり活動、農事組合発足と、次々に活動が広がっていきました。菓子部や長野山緑地公園の経営、農家レストランも加わり、それぞれの責任者はすべて女性です。工房での最高齢は82歳、この過疎地でも働く場所があることに、みんな生きがいを感じています。

そして、女性の発案で男性が動く。渋川

では女性を中心になって動くことが、ごく自然に当たり前のことになっていきます。

## 今後、どのように活動を展開される予定ですか？

交流・定住人口の増加のための活動展開として、仕事などの様々な理由で地元を離れて暮らしている人たちに、「渋川の里だより」という情報紙を発行し、地域の出来事や工房で作った商品などを紹介しています。

このような試みを積極的に始めたことにより、渋川の良さを知ってもらい、ファンが増えることで、イターンやUターンする後継ぎ世代が増えるなど、地域が活性化するための理想的なビジョンを、住民みんなで知恵を出し合っていきたいと考えています。

今後の課題として、地域住民の移動手段があります。高齢化が進むことで、自分で車を運転することが徐々に難しくなっており、自力で移動できる者が少なくなってきました。今まで当たり前だった移動手段にも支障が出てきており、交通面での対策を考えなければならず、これから行政にも働きかけていくつもりです。

(取材：原田浩、藤谷)



地域おこし協力隊  
隊員 松崎ひかりさん

ほっとする居場所づくり  
若い女性の“活躍”を

## 「地域おこし協力隊員」に取り組まれたきっかけ、活動について教えてください。

生まれは光市です。山口県立大学へ進学、卒業後は東京、オーストラリア、タイで過ごし、帰国後に徳地での「地域おこし協力隊」隊員を募集していたので応募し、平成25年に採用されました。

山口県以外の生活があったおかげで徳地の魅力がさらに再認識できました。

協力隊の任期は3年ですが、特産品である「やまのいも」と「カワラケツメイ茶」の宣伝と、地域交流の拠点づくり、定住を目的とした生業づくりをすることもミッションに含まれています。現在、大学時代から魅かれて研究していたリラクゼーションを活かし